
僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣

【Nコード】

N2653Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

バカテスと東方のコラボです。

明久魔改造、咲夜はPADじゃない(ここ重要)、文才皆無なんです
すが頑張ります

あと更新ですが思いつきで書くんできなりら話進んだりとかまば
らです。

ストック?何それおいしいの?

挨拶兼補足

初めまして影月です。

このssはバカとテストと召喚獣と東方とちよつとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。

東方キャラ登場（頑張ります）

お話のメインはバカテスト本編

過度のブレイク&amp;キャラ崩壊

メルブラ要素あり

等ございます。お気をつけて下さい。

あとキャラ設定ですが、

明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙と早苗は明久の二つ下となっております。

そして最後に：咲夜はPADではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「ZZZZZ…」

「…ひ…ろ。…久……てば…」

「う…ん？」

「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」

「ふ…うああああ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」

朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まあホントはまだ色々あるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。

幽香もいるし早く着替えてこいよ」

「え、あ…うん、わかったよ」

「…二度寝すんなよ？」

「しないよ!？」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい!!

制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね!？）（リビングに行くと、

「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」

「幽香おはよう」

声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン）」）なんか電波

が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。

実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけならしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより…

「なんで今日は遅いつてわかったの？」

「その花から聞いたのよ」

「あゝなるほど」

花から聞いた…聞き様によってはおかしな発言だけど事実である。

彼女達は「〳〵程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」

その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。

「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」

「お任せする（するわ）」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ1（後書き）

うん…ggdgdだ…orz

読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？

1 つけてほしい

2 いらなかな

期限は4日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね〜ここで明久は運命の扉を開く!!（嘘です

一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行ってる、ということになってます。

なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

side 明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書いてないだけです。（私を見ないでえええ、てかメタるなああby作者）また電波が…
ま、まあテストに集中しよう…

ガタツ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します…」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言って、教卓に戻ろうとする教師。ちょっと、まさかこの教師倒

れた人間に自分で保健室に行けって言うのか!?

「…………しつ…れい…しま…あ…!?!」

「!?!」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫? 姫路さん? ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」

「吉井くん…でも…」

「気にしないで」

さすがに、ほっとけないし連れて行く。

「吉井、何をしている! 早く席につけ!」

「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません!」

「貴様も、無得点にするぞ!」

「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」

「待て、吉井貴様!」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちょっとごめんね?」

「え?… / / / / / !?!」

ちよつとあれだけ抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行く。

side 明久end

side 妹紅

やっぱ、明久だよな。

自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたし

な…。

(さうでございましょうかな…)

明久は無得点だし、あいつがいないとこ行ってもつまらないしな…
幽香もそうみたいだし…

いつその事名前無記入で出すかな？

「チツ、屑が…」

そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑
ごときが私を侮辱して…」

…っん、聞き間違いじゃないらしいな…

『』ガタッ！…！…！『』

あら？音が二つ？気になってそつちを見てみると、すっごい笑顔の

幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか!？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「ええ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち!？」

「最悪な屑は、お前だ(貴様よ)」

『ドゴン!…!…!…!』

「げふ!!??」

「じゃあ、私も退席しますね」

「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハア…

side 妹紅end

side 明久

なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…
よし着いた。

「失礼します」

「あら？明久君、どうしたの？」

「永…八意先生いたんですね。すみません急患です」

「そう、じゃあそのベッドに寝かせて」

この人は八意 永林。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（
休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」

「そうですか」

「でも、明久君？テスト中じゃないの？」

「実は……」

とりあえず、さっきあったことを永林に話した…

「ふ〜ん…その先生って何て名前？」

「え？〜先生です」

「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」

「もうテストは受けられないし妹紅と幽香を待とうかと」

「あら、それならお話ししましょうか。今暇なのよね」

「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聞いたところ、永林が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は+2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あゝそれはね（幽香説明中）……っということよ

「……ほう、でその教師の名前は？」

「ゝ先生（慧音切れてるな……）」

「（切れてるわね……）」

『プルプルガチャッ』

「ああ、永林か？慧音だ……実は……ふむなるほど私も参加するとしよ

う」

「……（ご愁傷さま）」「」

後日、この教師は首になったそうだ……（妹紅談

第1話 朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話 朝の会合

4月…

今日は文月学園の始業式である…

その頃明久は…

「ZZZZZZ」

「…うん…ZZZZZZ」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」

「うん？ふああ…あ、幽香おはよう」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう？

「…おはよう。ところでそれ、何？(ニコッ)」

「え？(隣を見る)…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」

「まあ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろう…

「実は昨日モン　ン3してて…」

「…何時までしてたの？」

「えっと3時くらいまでは記憶がある」

「…」

「…」

「はあ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言うるでしょ…」

「あははは…ごめん…」

「まあいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えっ…」

「それとこれとは話は別よ(ニコッ)」

「ハイ、ワカリマシタorz」
こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなつちやつてそのまま寝ちゃった…」
「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけ
ましたよ…」

朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし

「あはは、まあ明久なら大丈夫でしょ」

「ひどいな、僕は普通の人間だよ？」

「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まあかつこいいけどさ…ノノノ（ボソッ）」

「?どうかした？」

いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？

「いやノノ何でもないノノノ」

「そう?ところでさ…」

やっぱりこれは言わなきゃだよな…

「妹紅：やっぱり男子制服で行く気？」

そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…

「ん?あゝ、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」

「そうか…僕は似合うと思うけどな」

「あはははノノまあその、ありがとう」

「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ」

「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」

「わかった」

さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

「おはよう、吉井、藤原、風見」

校門前でスーツを着た先生に出くわした。

「おはようございます、て…西村先生」

「おはようございます、鉄人」

「おはようございます、西村先生」

「ああ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか？あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」

「気のせいですよ、先生」

「え？かつこいいと思うけどな…鉄人って」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」

結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。

「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」

「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、Fクラスだった。まあ仕方ないよね、途中退席だし

「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」

「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ（したからよ）」

「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかるう…」

「うっ…それはたしかに…」

「言いごたえ出来ないわね…」

「まあ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生
たちに礼を言っとけよ？」

「…はい」「」

「あはは、気にしなくてもいいよ」「」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」「」

「んっ、そうか。」「」

あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話 朝の会合（後書き）

1話まで書けた：一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。まあ飲んでも酔いませんけどね。あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。暮らしとして

幽香 明久 慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（前書き）

…え？PV2000超え…？頑張らないとだな…

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。

「確かに時間あるし、見ていこうか」

「そうね」

少年少女達移動中…

「……………」

「アハハハ…」

「何よこれ…」

目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…

「無駄にお金のかかった教室だね…」

「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！」

「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、やはりあの先生が担任なんだ…」

「私あの先生苦手だな…」

「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」

これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどちらも高橋先生が苦手らしい。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」
「?????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者が…」

「「え?」」

霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない?」

「あく確かにそうだな」

「それがどうかしたの?」

「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」

「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう(のか

しら)…(ボソツ」

「?」

「そろそろ教室行こうか」

僕たちはFクラスの教室に歩き出した。

この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねえ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな?」

「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」

「これは…ひどいわね…」

今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。

「と、とりあえず中に入る。きつと外よりはマシだよ。」

「そうだな…」

「そうね」

そう言つて、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』

「おはよ」「さつさと席つきやがれ、蛆虫やろう」「う?」

なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった…

「つて雄二なんで教卓に立ってるの?」

「そりゃ担任が」「蛆虫やろうとは言い根性してるな(わね)…」「え?」

罵声を浴びせた少年、坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…

「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」

「まて、それはお前たちじゃなくて明久のことで…」

「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」

「覚悟出来てるんだろうな(わよね)?」

「ち、ちよつと待つてくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから??????あ、明久!。助けてくれ!。」

雄二が助けを求めてくる…仕方ない…

「二人とも…」

「なに?明久」

「あとでやつてもかまわないから、今は席に着こう?」

「「そうだな(そうね)」」

「ち、ちよつと待て明久!?見捨てる気か?!」

雄二は必死に助けを求めるが、

「だって原因雄二じゃん」

僕は切り捨てることにした。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？

とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略に明久はどう
う対抗するのか？

お楽しみに（大ウソです

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（前書き）

明久の紹介どうしようかな…あと最初の担任変更b

第3話 自己紹介と粉砕されるちやぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」

「あ、すいませ…って慧…上白沢先生…」

後ろから声がかけられたので振り返ってみると、そこには慧音が立っていた。

彼女は上白沢 慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている

「あ、慧音おはよう」

「藤原さん、学校では上白沢先生です」
敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）
…上白沢慧音です」

「なあ、明久慧音どうしたんだ？」

「さつき黒板見たときチヨークがなかった…」

「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」

ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチヨークを取りに行った…

「うおおおお！！すげえ美人だ！！」

「不思議な帽子をかぶってるが、逆に美人度が増してる！！」

戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いているようにも見えただけ気のせいのはずだ…）

「えっと、何かありますか？」

「付き合ってください！！」

「…」
「異端者には、死を！」

「…」
「すみませんでした！！！！」

「ばかばっかね」
「ハア」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

「あと言っておくが、わしは男じゃ」

「……な、なんだと!?」

みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持っているがまあいいだろう。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です」

『シュッ!』（幽香がペンを投げた音）

『ガッン!!!』（慧音がチョークで相さ…はじいた音）

「え…?」

呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げないように」

「考えとくわ」

「幽香…」

「…わかったわよ…」

僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に
関しては投げる前に止めた）

「島田さんもそのような発言は控えるようにしてくださいね（ニコ
ッ）」

「は、ハイ…（あの二人…吉井とどういう関係かしら…）」

島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだろう…

「あいつには気をつけなきゃだよな」

「そうね…」

「どうしたの？二人とも」

「「気にするな（気にしないで）」」

2人はそれぞれ笑顔で言った。

「……………です、よろしく」

次は妹紅だな

「藤原妹紅です、男子制服を着ているが女なんであしからず」

「なるほど木下みたいなものか」

「じゃから、わしは男じゃ…！」

うん…もう突っ込むまい…

「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」

「……」
「異端者には、死……」

「明久に手出したら…」

『バギャンツツツ！！！！』（ちゃぶ台が碎け散る音）

「こつなるからよろしく」

「「「YES sir!」」」

「も、妹紅…」

「だつて明久に…」

「それもだけどちやぶ台…」

僕らの前には砕け散った妹紅のちやぶ台…

「」

「」

「明久、ちやぶ台一緒に使わせて…」

「別にいいけど…」

おつと次は僕か…うゝんこの微妙な空気どうしよう…仕方ない…

「「コホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくだ

さいね」

…ボケよう

次の瞬間、

「「「ダアアーリーーン!!。」」」

野太い男の大合唱。

「（言えるわけないだろうノノノ）」

「（明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら?）」

「（何言ってるんだ、あいつはノノノ）」

やばい、吐き気が…空気を変えるためとはいえやるんじゃなかった

…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう?

「????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお

願います。」

さあ気を取り直して次は幽香だね

「風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」

ふう、普通だ…

「あと、明久の幼馴染でもあるわ」

すっごい笑顔で言い放った…やっぱりこの人さだ…僕が困るところをそんなに見たいのか…？

「くそう、なんで吉井ばかり…」

「あんな不細工が…」

うわ〜みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…

「あと、明久に手を出したら…」

？やばっ！？

『ゴウツ！！！！』（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）

『バシッ！！！！』（幽香の手をあわてて明久が止めた音）

「どうしたの？」

「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…で
も手加減してたみたいだね…）」

「…仕方がないわね…」あの、遅れて、すいま、せん。「…」

「…え？。」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（後書き）

さて机が二つ犠牲になるところでした。

慧音の頬の血は気のせいさ…（ハハハ

ちなみにチヨークとペンは相殺で粉碎しました。

第4話 理由と試験戦争（前書き）

PV2000っていったころにはもう3000行きそつだ…

第4話 理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。

走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？
????？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかかそうな髪を持った少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいますか？」

聞き方によっては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その????????振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして????????」

やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…(プ
ロローグ2参照

「明久…」

「大丈夫だよ妹紅ちよつとね…」

いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…
すると先ほどの姫路さんの発言に

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あれはむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「……異端者には…昨日私は明久の家に泊まってたからあり得ないな」「ちよつ、妹紅!?!?!: チクシヨオオオオオオ!!!
!!!!!!」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願いします!」

そう言うつと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「き、緊張しました〜」

そう言うつと瑞希が卓袱台に突っ伏した。

「あのさ姫「姫路」…」

体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやが
つた…

「は、はい。何ですか?え〜と……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで体調もう大丈夫なの？」

「よ、吉井君!？」

声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだろう…ちょっと悲しい…

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな!目もパツチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!」

「そうね、女性に向かって蛆虫っていう奴よりははるかにかっこいいわね」

「うん、ゴリラよりは絶対かっこいいな」

「うぐつ…ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持つてる奴がいたな。」

「それって誰ですか!？」

雄二が言うのと嫌な予感しかしないな…

「確か久保ー」

「久保?」

「利光だったかなあ。」

久保利光 | (性別 オス)

…うん、だろうと思ったよ…

「…(ホッ)」

「ゴリラ…」

「え?…」

「「覚悟はできてるか(わよね)?」」

「「ちよっ!?!?」」

「ほらそこ、静かにしなさい」

「あ、すいませ…」

『バキツ、パラパラ…』（教卓が残骸となった）

「…ちよつと、替え持ってきてますね（あの学園長どうシメテくれようか…）」

「あ、手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待っていてください」

さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…

「…雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

暇になったからか欠伸をしている雄二に声をかける。

「ここじゃ話しにくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」

「雄二この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

「…何が目的だ。」

雄二が警戒するように目を細めてこちらを見る

「何がって、姫路さんと妹紅達のためだよ」

「……」

「あの教室じゃ体調崩すのは目に見えてるからね」

「お前：本当に明久か？」

「それどういう意味さ!？」

「まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思ってた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「????？」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

「ではクラス代表の坂本君、最後をお願いします」

雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。目立ちたがりだね。雄二

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」

「じゃあゴリラで」

妹紅：

「所で皆に一つ聞きたい。」

そう言つと雄二は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!?!?!?!」

Fクラス魂の叫びである。ちよつと耳が痛い……

「だろう？俺だつてこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう・・・すごく不安に感じる・・・

第4話 理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ？」

「うん？あゝ試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配
なんだよ」

「／／／／／／／／／／」

「？」

第5話 戦力と観察処分者（前書き）

．．．．．（ゴシゴシゴシ）
．．．

PV5000 超え．．．だ．．．と．．．？

第5話 戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う!!」
壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり
言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。
「勝てるわけがない!」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!」

「姫路さんが居たら何もいらぬ。」

「もこたん付き合って」

「断る」

「ゆづかりん罵ってください」

「……シニタイノカシラ?」

「うおおおおおおおお!!!!!!」

何だろう、カオスだ…

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって
試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦
争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。

しかし雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。

片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。

片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる!」
しかし雄二は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放った。提案し
た僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか?

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今
からそれを説明してやる!」

そうゆうと雄二は少し間をおいて、ある一カ所を見た。

「土屋。畳に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

でこつちに来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ!?!」

「あらあら……」

「ゆ、幽香?……」

「?どうしたの明久?覗かれてないわよ?」

「……………くっ」

「いや、よく手を出さなかったな〜って……」

「…すぐに切れてると迷惑かけるもの……」

「そうか……」

まあ話は戻してつと、土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者^{ムツツリーニ}だ」

「……………!!」

雄二の発言に、クラスのとよめきが走る。

彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムツツリー
ことなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生
徒には軽蔑の対象として挙げられている。

「ム、ムツツリーニだと!?!」

「馬鹿な、奴がそうだというのか!?!」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしてい
るぞ……」

「ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ……」

「……………」

まあ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思うよ
…友人として

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は
知っているはずだ」

「えっ? わっ、私ですかっ!?!」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらぬ」

「あと風見幽香もAクラス並みの点数点数保持者だ」

「そうだ！幽香様がいた！！」

「ゆうかりいいいいいいん！！！！」

「明久…ねえあれヤツテイイ？」

「…ダメだからね？」

「藤原妹紅に関しても、古典、歴史関係はAクラス並みだ」

「…もこた〜ん！！！！」

「幽香の気持ちわかるかも…」

「アハハハ…」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

Aクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で

有名な人物。そして、雄二は…？

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人もいるって事かよ？」

もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

やっぱり雄二は人をまとめるのがうまいな…こういうところは悪友とし

て認めてるんだけど…

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言が

あるね…

静まりかえる教室…なんで僕の名前を言うかなあ。

「誰だ？ 吉井明久って？」

「知らねえよ。」

雄二の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラス
メイトはざわつき始めた。

「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」

雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

まあ、普通そういう評価だよな……

「ああ、学年1のバカの屑だ」

そこまで言うかこのゴリラ……

「ほう……ゴリラ……そんなに燃やされたいのか？」

「そうね……肉片にして花の肥やしにしようかしら……でも花がかわいそうね……」

「し、しかし明久は教師の許可をもらって俺たちより召喚獣扱って分操作技術だけなら学年1だ」

「それってすごいのか？」

「ああ、盾くらいいはできる」

妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言いようだな……

「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」

「そうだ！ これだけの人物がいるんだ！ 絶対勝てる！」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じゃない！」

「そうだ！ 俺たちに必要なのは座布団じゃない！ リクライニングシートだ！」

まずは俺たちの力の証明としてDクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？

「当然だ！！！」

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！！」

「おおおおおっ！！！」

「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！！」

「うおおおおおっ！！！！！」

「お、お……」

秀囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。

何だろっ…僕には不安しかないよ…

第5話 戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…

ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは20%くらいとします。

思いつき次第次話を投稿します。

第6話 宣戦布告とUSSC(前書き)

幽香様降臨

第6話 宣戦布告とUSSC

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらおう。無事大役を果たせ！」

「待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者つて、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」

予想的中か…

「大丈夫だ、騙されたと思つて行つてみる。俺は友人を騙すような事はしない。」

「いや、よく騙すでしょ？」

「…じゃあ私が行こうか？」

「さて藤原、お前が行つたら…」

「だって危険はないんだろ？それなら問題ないじゃないか」

「そ、それは…」

はあ、いくら嘘だつてわかつてても妹紅をそんなところに行かせたくないしな…

「わかつたよ…じゃあ僕が行つてくるよ」

僕は宣戦布告の為に教室を出た。さっさとすませよう。

side 妹紅

「さすが明久だな。簡単に騙されやがる」

ゴリラがクククと笑つてやがる…やっぱり…

「やはりそんな魂胆じゃつたのか、雄二よ」

「それ以外何があるんだ、秀吉」

ため息をはきながら木下はゴリラに言った。やっぱりこいつ燃やすべきかな…でも

「だつたら残念だつたな、ゴリラ」

「？ 何がだ。あとその呼び方はやめる」

「だって幽香がついていったからな」

「？どういう意味だ？」

まあ、明久もいるしそこまでしないだろう。

side 明久

さてDクラス前に到着した…

「待ちなさい、明久」

「あれ？幽香どうしたの？」

「私も行くわ」

本当は断りたいところだけど、まあ危険になったら庇えばいいか…

「失礼します」

「？誰、君」

ちようどいいや

「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」

「いいわよ、平賀君」

「？なんだい」

「あ、えつとDクラスの代表ですか？」

「そうだけど…」

代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さつさと言って帰ろう…

「えつとFクラスはDクラスに対して宣戦布告します」

「え？」

そりゃ驚くよね…

「おいお前ふざけてんのか？」

Dクラスの男子だろう…いきなりこちらを睨んできた。

それに従って複数人立ち上がってるし…ハア…

「てかさ、こいつって確か観察処分者じゃね？」

『ピクッ』

「あゝあのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』

「そうそう、人間の屑の代表」

『ブチッ』

あっ…

「じゃあかたずけても問題な「ねえ、貴方達…」なんだ？」

「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの？」

ダメだ…笑顔なんだけど目が笑ってない…

「ましてや、さっきから聞いてれば明久の侮辱ばっかり…」

「お、お前何言って「私ね、自分のものが侮辱されるのはとっても我慢ならないの」「えっ、僕ってものなの？」「えっ、え？」

「ということ…いい声で鳴いてね」

「ちよっ、ま…」

side 妹紅

ぎゃあああああああああ…！！！！！！

「「「「「！？」」「」「」

ものすごい悲鳴のするなか、私は落ち着いていた。

「やっぱりか…」

「…どういうことだ？」

「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけに…」

「おまけに？」

「USC（アルティメットサディスティッククリーチャー）、あいつの通称だ」

「え？だが学園ではそんな…」

「基本明久が押さえてたからな…だが堪忍袋も切れたんだろう、お
もにお前が原因で」

「…」
雄二としてはさっきの悲鳴は明久のものであつてほしいと思つたん
だろう…

するとドアが開いて…

「お、下ろしなさい／＼／＼／＼」

「下ろしたらまた暴れるでしょ？」

明久が幽香をお姫様だっこして現れた…いいな…

side 明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…

「大丈夫か？明久」

「うん、まあ幽香が暴れたので助かったよ…止めるのに時間がかつ
たけど」

「吉井」

島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！

「ちよつとさっきのどういふことが聞きた」「それより前に放せ（
放しなさい）」「わ、わかったから首掴まないで…」

「大丈夫か？明久よ」

「秀吉…うん大丈夫だよ」

なんか向こうでいざこざが起こつてるけど無視だ…

「それより坂本君、貴方…」

「よし！ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋
上に行くぞ！」

あ、逃げた。まあ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…
はあ、先が思いやられる…

第6話 宣戦布告とUSSC（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほう…忘れてるとはいい度胸だな…」

え？慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ！…！」

いやあああああああああああ…！！！！！！！！

第7話 ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。

あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね〜あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

第7話 ミーティング

「……………(サスサス)」

「ムツツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ?」

「……………!!(ブンブン)」

「いや、今さら否定されてもムツツリーニがHなのは皆知ってるから」

「……………!!(ブンブン)」

「ここまでバレてるのに否定し続けるなんてある意味凄いやと思う」

「……………!!(ブンブン)」

「何色だった?」

「姫路が水色、風見が…見えなかった(クツ)」

「いやそこまでですらすら言えてる時点で…」

「?私のがどうしたの?(ニコツ)」

「……………次こそは…」

「明久じゃないと無理よ」

「え?」

「ナニライダスنداコノヒトハ…」

「だって明久、お風呂一緒に入ったことあるじゃない(ニヤニヤ)」

「…うん…USCですわかりますorz」

「何…だと…?」

「いやt「吉井、どうい」はいはい話は最後まで聞こうね「ちよっはな」

「まあ小さい頃の話だし、それ言ったら私だってあるしね。露天街あるし」

「妹紅…それ庇えてない…」

「皆の衆…ここはどこだ?」

「」「」「」「審判の法廷」「」「」

「男とは…!」

「『！』『愛』を捨て、『哀』に生きる者成りッ！」「『！』」
「これより審判を行う」

「ハイ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に…」

「簡潔にのべたまえ」

「実にうらやましいであります！！」

『』『』『我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をッ！！死をッ！！』『』『』

うわ…変な黒い集団が…ゴキ を思い浮かべてしまった…

「とりあえず、しになさい」

「とりあえず消えろ」

「『』『』『ぎゃあああああ！！！！』『』『』『』」

屋上に出ると、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる…
ムツリーニ…努力はいいけど…スカートの中を覗こうと頑張るのはどうかと…

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各々その辺に座る。

「うん、一応今日の午後の開戦予定と告げてきた」

「それじゃ、先にお昼ご飯って事ね？」

「そうなるな。だからしっかりと腹ごしらえしとけよ」

「明久、はいこれ」

幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ？なんで…

「台の上に忘れてたわよ？」

「あ、そうかありがとう。危うく飯抜きになるとこだったよ」

「あの…」

「どうかしたか？」

「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど…」

「そりゃ、明久が作ったからね（からよ）」

「まあ、たまに作ってもらったりしてるしね」

「そうですか…」

あれ…何だろう、気のせいかな？今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じただけけど…。

「で、どーゆー事なのよ吉井？」

「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」

「いいからさっさと質問に 待って藤原さん、ウチの首は180度曲がったりしないから勘弁して欲しいんですけど…」

「だったら、とつととその殺気を引っ込めて腕を放してもらおうか？」

「っーか明久お前料理なんてできたのか？」

「それってどういう意味さ」

「お前去年、飯食ってなかったじゃねえか」

「一時期、昼飯を水と塩で乗りきってた事もあったしのう」

「……………舌が肥えてるとは思えない」

「そうね。絶対にあり得ないわね」

うわ…ひどい言われようだ…まあ事実そんな時期もあったけど…と
りあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そう…（
ガクガク

「すぐくおいしいわよ？」

「そうだな、私達もよく味見たのんでるし」

なんか褒められると、少し恥ずかしいな…

「あの、吉井君」

「ん？」

そんな中、さつきまで考え事をしてた姫路さんが口を開く

「宜しければ私のお弁当も食べてくれませんか？」

「え、どうして？」

「是非吉井君に味見をしてもらいたいです」

「いつ？」

「明日のお昼で良ければ」

「うーん、まあいいけど」

問題はないかな？

「……………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「おお、それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

僕は小物系作ってくるかな……

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そうか」

あ、そーいえば試召戦争のミーティングやってたんだった。すっかり忘れてた。

「雄二よ。一つ気になっていたんじやが、何故Dクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そーいえば、確かにそうですね」

「坂本君の事だから、何か考えがあつての事だと思っけど」

「まあな。理由は色々あるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かったかもしれない。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみる」
えーっと……

「うん。幼馴染みが二人と美少女が一人、親友が一人にバカが二人にムツツリが一人いるね」

どれが誰かは言わなくてもわかるだろう…

「誰が美sゲフツ」『ドゴツ』

「で、それがどうしたのかしら（ニコツ）」

何か言おうとした雄二を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いって事だ」

「？、それじゃあDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「一応ちゃんと考えてたのか…」

「まあこれも打倒Aクラスへの必要なプロセスだからな問題ない」

内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね
ま、その時が来たら解るか。

「あ、あの！」

？どうしたのかな？

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき明久に相談されて「それはそうと！」」

雄二は何言っかわからんから発言させるか！！

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」

「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろうと必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは 最強だ」

聞いた限りかっこいいんだけど、心配ごとしかないのはなんでだろ
う…

第7話 ミーティング（後書き）

閻魔さまこと映姫に関してですが外見案で

1 幼女

2 明久と同じくらいの少女

3 お姉さま

結果は決まり次第お伝えします

第8話 Dクラス戦1（前書き）

PV1万突破：突破記念短編考えなきや

第8話 Dクラス戦1

side幽香

ついに始まったわねDクラス戦…

私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかって？明久から謹慎処分喰らってるのよ、仕方ないじゃない…

「……今前線部隊と敵が衝突中」

「状況は？」

「……今のところ互角」

Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けている…しかし彼どうやって状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗聴器は破壊したはずなんだけど…

「そっぴいや風見」

「何かしら？」

「お前、補給テストは…」

「ある程度だけど受けてるわ」

「…いつの間だ？」

「途中退席をした次の日よ。ああ、明久と妹紅も受けてるから問題ないわ」

まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わなかったわ…

どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだね（プロログ2参照）

しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らってるし…明久から喰らってるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝ったら明久に何頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないように思えるわ…

side 明久

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしがおかしいって？H A H A H A何を言ってるのさ

「明久、お願いだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だあつ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤアアア（ボタン、ガチャ）』

やばいすごく逃げ出したい…

「ところでテストやっぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになってる。周りにとって僕は『勉強のできな
い観察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はあ、わかったわよ…いくぜ、明久！！」

「Fクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」

「ここにいるDクラス全員に対して、勝負を申し込む！！試験召喚獣召喚！！！！！！」

僕達が手を合わせるようにあげると足元から、魔法陣というべきだろうか：幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。

僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としっぽがついたようなデザインだ。

「いくよ！」

「いくぞ！」

「たかだかFクラス二人だ。一瞬でつぶすぞ！！」

「ましてや一人は観察処分者！！」

Fクラス

吉井明久 古文 62点

藤原妹紅 古文 317点

VS

Dクラス

モブ×10人 古文 平均101点

「……な、何だあの点数！！！？」「……」

「ちえ、やっぱちゃんときなかつたから400点行かなかつたや」

「でも高得点には変わりないよ」

「ひ、ひるむな！！数でつぶすぞ！！」

「……お、おう！！！！」「……」

「そんなに甘くないっての」

妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた…

「……ぎゃあああああ！！！！！！」「……」

Dクラス4名 0点 戦死

やっぱすごいな…おっと

「妹紅危ないよつと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた

Dクラス2名 0点

「え・・・なんで？」

どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくない限りは一撃で倒せるみたいだ...

同じ要領であと4人を倒し「戦闘描写すらなしかよ!!」「

「ハイハイ鉄人お願いしますね」「いやああああああ

!!!」「前線部隊はまだ先みたいだしな...よし、

妹紅...

なんだ？

「前線部隊のところまで行く間にどっちが多く倒せるか勝負しない？」

「お、それ楽しそうだな。じゃあ私が勝ったら今日の晩飯慧音と一緒に食おうぜ」

「?いつものことじゃ...」「いいんだよ」「そう、じゃあ...」

「くそ、こいつらなめてんのか？」

妹紅...

おう

「ゲームスタートだ!!」

なんか、弾幕勝負を思い出すな...

あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちゃった...orz

第8話 Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収とちよつとですが、明久のことが
出ましたね〜

明「まだ内緒ごとはあるんだけど後に書くんでしょ？」

書けるかな・・・（遠い目

明「ちよつと!?!?」

PV1万記念短編 向日葵の記憶(前書き)

300目で14000越えて…

題名から誰のことかわかるかもしれませんがどうぞ

PV1万記念短編 向日葵の記憶

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない……

それはホントにただの気まぐれだった……

「さて水をあげに行こうかしらね」

私はいつものように向日葵畑に出た。

「あら？」

するとそこには5、6歳くらいだろうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた……

いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし……話しかけてみようかしら……

「あら？人間の子供がなんのようかしら？」

「え……」

いきなり声をかけられたことに驚いたのだろう……その子はびっくりしたように振り返った……

「……」

見ようによつてはかわいらしい顔立ちだろうか……しかしそれよりも私が見入ったのは……その瞳だった。

濃いめの茶色……どこにでもいそうな色だったが、

深かった……まるで吸い込まれるような……すべてを見透かされるような……そんな瞳をしていた……

私はそれに見惚れ、そして恐怖した……

こんな子供が……ここまで深い思いを瞳にうつせるものなのだろうか……

「お姉さん誰？」

「いけない…思考にふけるとこだったわ…」

「名前を聞く場合、自分から言うのが礼儀ってものよ？」

「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」

「明久ね…私は風見幽香よ」

「へ〜」

どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…

「明久、気をつけたほうがいいわよ？」

「何を？」

とりあえず…

「ここにはね…とっても怖い妖怪が現れるのよ」

「じゃあ、ここを出なきゃかな…」

「そうね…だから早く…」
「こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね」
「え？」

この子なんて…

「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどすごくでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」

聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…

でも…

「じゃあ、またねお」
「まちなさい」？

「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る？」

「え…でも」

「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし（まあ、自分のことなんだけどね）」

「う〜ん、じゃあ行こうかな」

笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まあ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…

それから明久はちよくちよくとこの遊びに来るようになった…
そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになっていた…

でも、ある意味予想できて、起こってほしくなかったことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会って数カ月たった時、八雲紫の一言が始まりだった…

「そうなんだけど、どうもこの妖怪ね、人の話を全く聞かないのよ

…」

「なんでそんなのを…」

「まあ、そんなだから気をつけてね」

あ、逃げた…

昼頃…

早く行かないと…今日は明久が向日葵畑で待つてるんだった…

その時、私は気づいてしまった…向日葵畑に感じたことがない妖力を感じることに…

(まさか!!朝紫が言っていた妖怪!?急がなきゃ!!)

そこに着くと、明久とあれは…鬼?でもなんか違うような…

「コドモ、ウマソウナコドモ。」

その鬼?はまるで踊るかのようにはしゃいでいた…あ…

「な、やめろ!!花が傷つくじゃないか!!」

「ハナ?コレ?ジャマクサイナ…」

その妖怪は向日葵をまるでごみをのけるかのごとく、棒でなぎ払った…

あの妖怪…クロス…

私は、あのごみを消すために傘を構えようとした…

「…やめろ…」

『ゾワッ』

「「!?」」

な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何!?

「この花達は幽香が毎日頑張って育てたものなんだ。それに気安く触れるな!」

「……………」

明久の茶色だった瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた…周りを包むような殺気。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…

ああ、そうか…

「フ、フザケルナアアア!」

妖怪は明久に恐怖したことが許せなかったのか、明久に飛びかかった…

『ガツンッ』

「なっ!」

しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によって止められていた…

「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノニ…」

「ええ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」

私は…相手に向けて傘をつきつける…

「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」

「覚悟はできてるわよね?」

「ヤ、ヤメ…」

「…消えなさい…」

「マスタースパーク…」

「あれ?」

「あら？起きたの？明久」

「えつと・・・なぜ僕は膝枕されてるのでございましょうか？」
時折この子の思考がわからないわね・・・

「貴方、私が来なかつたらどうする気だったのかしら？」

「あ、そうか僕妖怪に襲われて・・・」

「ねえ、明久・・・」

「なに？」

「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思うの」
「うん・・・」

「だから・・・逃げる手段として私が特訓してあげるわ・・・」

「えっ・・・」

ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・

「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと来なさいね？」

「・・・はいorz」

ほんと明日から楽しみだわ。

思えば、この時・・・いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見ていたのかもしれない・・・

「・・・夢・・・みたいね」

はあ、まさか明久と会ったころの夢を見るなんて・・・／／／／
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあったのよね・・・
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな・・・

「おじやまします。明久、起きなさい」

.....

まだ寝てるみたいね・・・

私は明久の部屋の行こうとしたとき、リビングにある花に気づいた…
「…ふふ」

それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、
ちゃんと育てているらしい。

胡蝶蘭…清纯、純粹という花言葉を持つ花…

でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう

…この花をあげた本当の意味に…

もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛しています

PV1万記念短編 向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…

ちなみに時期的には第1話の直前です。

ちなみに向日葵の花ことばには「私の目はあなただけを見つめる」というのもあるそうです

第9話 Dクラス戦2 (前書き)

とうとう彼女が…うまく書けるかな…

第9話 Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「そうじゃのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじゃ…!」

「…「イエツサ!」」「」

島田と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしかや美波お姉さま!五十嵐先生、こっちに来てください!」

戦場に響き渡る声に、島田は顔色を青くする。

「くっ!ぬかつたわ!」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということ…!」

「美春…だから言ってるでしょ!!私は普通に男が好きなんだって…!」

「いえ、お姉さまも美春のことを愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかったから美春を捨てたのでしょう。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あなた」

「…なんじゃろうか…帰ってもよいか？」

「き、木下！！手伝いなさい！！」

「はあ…しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本気で帰ってはだめか？」

「き、木下…!?」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚」

「あゝもう、試験召喚獣召喚」

Fクラス

島田美波 科学 52点

VS

Dクラス

清水美春 科学 78点

このままではやられてしまう。そしたら補習室に……

「い、いや！補習室は嫌っ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を与えた。戦死した、と思った島田であったが

「え？」

島田美波 6点

点数が僅かに残った。どうしたのか困惑していると

「フッフッフ……」

『ガシッ』

突然美春が島田の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行くこととしていた。

「ちょっと！ どこに連れて行くこととしているの！」

「どこに？ 愚問ですわ、お姉様……」

ゆっくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません！ さあお姉様！ 美春と共に大人の階段を上りましょう！」

目を爛々に輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよ！ 前から言っているけど、ウチは普通に“男”が好きなの！」

「大丈夫です、お姉様！ 初体験は怖いかもしれませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ！」

「い、いや！」

「無駄ですわ、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません！」

美春の言うとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。八方手詰まりだった。それでも誰か助けしてくれると信じて美波は助けを求めた。

「た、助け…」

「さあ、美春と一緒に…」「邪魔だ!!!どけ」「え?」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでのごとく燃やされ美春の召喚獣は…

清水美春 0点 戦死

「な、何が起こったのですの?」

その先の戦場では、

「ははは、燃えろ!!!」

「!!!ぎゃあああああ!!!」「!!!」

「…斬る…」

「!!!うわあああああ!!!」「!!!」

「戦死者はほしゅううう!!!」

「!!!いやあああああ!!!」「!!!」

明久と妹紅の召喚獣によってどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるDクラスの面々だった…

side 明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな…

「よし、明久!!!討伐数を確認するぞ!!!」

もこた…妹紅…討伐数って…

「えつと僕は17人かな…」

「…やったあああ！！勝った、18人！！！！」

「うん、おめでとう」

「明久、約束だからな！！」

「ふふ、わかってるよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや…

「明久、たすかったぞい」

「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかったなんて言えない…

「よ、吉井…」

「し、島田さん？」

「とりあえず助かったわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

第9話 Dクラス戦2（後書き）

なんていうか：突破短編で燃え尽きた：
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出
ます

第10話 Dクラス戦ラスト あとはよろしく(前書き)

私的事ですが・・・

空の境界は神作品だと思う!!!

第10話 Dクラス戦ラスト あとはよろしく

Dクラス付近

さすがに点もやばくなってきたな…

「明久、どうする?」

「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」

「おい、やばいぞ!! Dクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」

船越先生といえは数学・・・くっ、点数的にもうみんなやばくなってるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ!!」

「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ!!

side 雄二

風見が手洗いに行っている間に暇だな〜と思っていると須川が教室に入ってきた。

「坂本」

「? 須川どうした? 逃げてきたのか?」

「いや、吉井から船越先生のDクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい?」

「そりゃ、放送で…」
そう言えんば…ククク、ちょうど風見もないことだし、
「須川、……………」と放送で流せ（ニヤリ）
「……………了解だ（ニヤリ）」
ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄二が死亡フラグを立てているころ

side 明久

『ピンポンパンポーン』
《連絡致します》

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ……

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「……………え……………」

船越先生

数学担任の45歳独身

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に
単位を盾に交際を迫る様になったと噂の人・・・

「な、なんてこつた・・・Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・」

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言ってるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！！

《繰り返・・・『ドゴーンッ』なっ！！え、ちょ、やめ・・・》

『ぎゃあああああああああ！！！！』

「」「」「」「」「」「」「」「」

《・・・コホン、さっきの放送に訂正を入れるわ。船越先生、体育館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ》

()()(須川お前のことは忘れない・・・)()

《あと・・・坂本雄二・・・クビヲアラツテマツテオキナサイ！！！！》

あ、雄二終わったな...

「明久、私も行っていいかしら？(ニコッ)」

「妹紅・・・ダメだよ・・・」

今は戦争に集中しよう・・・

「吉井!!」

「横田君?どうしたの?」

「(な、名前が出た) Dクラスの代表の隊が、隙を見てFクラスに向かっているらしいぞ!!」

な、さつきに放送で見逃してしまったか!?

「みんな!!急いでFクラスに戻るよ!!」

「「「了解!!」」」

Fクラスに戻ると・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「チョット、マッテモラエルカシラ?」

「「「はい」」」

すごい笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄二と、

幽香の殺気おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え〜っと」

「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろう？」

あ、代表として何とか立て直したね。

「確かに僕たちじゃ無理だね」

「なら「だから、」ん？」

「「姫路さん、あとはよろしく」「」

僕と妹紅がそう言つと

「あ、あの…」

平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど…」

「い、いえ、そうじゃなくて…」

「？」

「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その…Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」

「はあ…、どうも」

「あの、えっと…さ、サモン試験召喚獣召喚です」

「え？あ、あれ？」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

Fクラス

姫路瑞希 現代文 345点

VS

Dクラス代表

平賀源二 現代文 128点

「う、ごめんなさい!」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であっさりと、斬ってしまった。

こうして、Fクラスの勝利は決定した。

第10話 Dクラス戦ラスト あとにはよろしく(後書き)

ふう、なんとかここまで書けた・・・

あとは戦後対談だ

戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

第11話 Dクラス戦 戦後対談（前書き）

今のところの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでしょ。

第11話 Dクラス戦 戦後対談

戦後対談したいんだけど…

「……………」(ボロボロの雄二)

「フフフフフフ……………」(目が狂気に染まってる幽香)

……………これ、どうしよう……………

「えっと……………」

「あ、平賀君ちょっと待っててね」

「あ、ああ」

さて、まずは……………

「妹紅、幽香を止めるから雄二を起こして」

「……………とどめさしちゃだめ？」

「今はいる人間だから普通に起こして」

「……………わかった」

さて……………

少年少女作業中

Dクラス

「／／／／／／／／／／／／／／／／」(只今、明久に後ろから抱きかかえるように抑えられている)

「(いいな・・・)」(その状況をうらやましそうに見ている)

「(はあ、明久に奴は...)」(FFF団を押さえながらもちよつとうらやましそうに見ている)

「ちよつ、ふ、藤原さん。う、腕放して・・・」(明久に尋問しようとしたところを妹紅に四の字固めされている)

「・・・」(呪呪呪呪呪)「・・・」(明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない)

「・・・」

うん、カオスだな(お前が言うか!?by作者)

「え、えつと・・・」

「あれは無視しろ・・・」(気絶していたところを、妹紅に思いつきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活)

「あ、ああ」

「じゃあ、対談と行こうか・・・」

でもよく雄二、幽香の攻撃に生き残れたな...やっぱり前より幽香、手加減うまくなったのかな?

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて・・・信じられん。」

気を取り直したように平賀君がつばやいた。

「あ、その、さっきはすいません・・・」

別の方向から瑞希が駆け寄って行って源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラス負けた、ということでもクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄二はその懸念を払拭した。

「何？」

「Dクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のを動かなくしてもらいたいんだ。」

そうやって雄二が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そうだろう。うまくやれば嚴重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もう。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」

「はは、そうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社交辞令だ。」

そう言うと源二は去って行った。

「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆつくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。

「さ、帰ろうぜ明久」

「あ、うん。帰ろうか」

「そ／／／そうね／／／／」

僕たちは帰路につくのだった・・・

慧音&妹紅宅（正確には部屋かな？）

「ただいま」

「あ、慧音おかえり」

「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」

「ああ、今ご飯作ってる」

「そうか、じゃあ着替えてくるかな」

「おう。私は手伝いしてくるよ」

リビング

「「「いただきます」」」

「今日は明久悲惨だったな・・・」

慧音の一言で今日の放送を思い出してしまった・・・

「慧音・・・それは言わないで。ホントにヤバいつて思ったから・・・」

「ああ・・・もうちょっと力こめとければよかった・・・」

「さすがに限度つてもんがあると思うぜ？あのゴリラのはふざけるにしても度が過ぎる」

「（ふむ、原因は坂本か・・・）まあ、船越先生には隣の草部さん（49歳独身）を紹介しといたから大丈夫だろう・・・」

「ん？どうした？明久」

「あ、ありがとうけいね〜！！！！」

『抱きッ』

「なっ、あ、明久／＼／＼／＼」

「（いいな……）」

「うう……」

「……もう……」（なでなで）

キングクリームゾン！！

「……ごめん取り乱しちゃって……」

や、やばい。つい安心から慧音に抱きついてしまった……

「まあ、気にするな／＼／＼」

「そうそう。あれは仕方ないよ」

「うん……」

「明日は………補充試験をやって終わりかしら？」

ご飯も食べて二人でゲームしていると、妹紅がそんなことをつぶやいた

「うん、たしかそれだけじゃなかったかな？」

「だったよね」

「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えているが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしている」

「やった」

「うん、楽しみに待ってるよ」

さて時間はつと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ろうな・・・」

「え、泊ってて構わないわよ」

やっぱり家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」

「ん？私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・
でもま・・・

「じゃあ泊っていいのかな？」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝た・・・

ホント、なにか忘れているような・・・

第11話 Dクラス戦 戦後対談（後書き）

おまけ

「・・・」（チラッ）

「・・・」（スウ・・・）（右 慧音

「・・・うん・・・」（スウ・・・）（左 妹紅

「・・・どうしてこうなった・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2653z/>

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月12日00時46分発行